

# 豊庄だより



第 695 号 2022 年 1 月 17 日

福岡市早良区南庄 2-26-13  
社会福祉法人林生会豊庄保育園  
園長 西尾 達

「岩波ホールが今年の 7 月 22 日に閉館」というニュース(1 月 12 日)に接し、「あの岩波ホールがなくなってしまうのか！」と強いショックを受けました。岩波ホールは 1968 年に開館。「岩波」という名がついていることからもお分かりのように、岩波書店が運営する映画館です(正確には岩波書店の創業家が関わっている)。東京都千代田区神保町にあり、国内外の名画を発掘し、他の映画館では見ることができない作品を紹介してきました。今でこそ、

地方都市にもこうした映画館がありますが、岩波ホールはそうした映画館(席数は 220、ミニシアターと呼ばれる)の草分け的存在でした。

地下鉄の駅(神保町)がすぐ近くにあり、東京に行ったときには神保町の古本屋街を散策し、ジャズ喫茶に立ち寄り、(時間が許せば)顔を出していた映画館です。岩波ホールの閉館はコロナ禍の影響により運営が困難になったためということでした。「宗家の三姉妹」、「カティンの森」等数本の映画を、ずいぶん前のことですが岩波ホールで見たことを思い出します。この時も席はあまり埋まっていませんでしたが、厳しい運営が続いていたのでしょう。そういえば、私も最近では東京どころか天神に行くのも慎重になり、福岡にある映画館(ミニシアター)に、2 年ほどご無沙汰しています。それにしても岩波ホールの閉館はととても残念です。

さて、コロナ禍は新たなステージに突入したようです。この「たより」を書いている時点(1 月 13 日)で、福岡市内の感染者数は 300 人を超えました。第 5 波の時に比べ、感染の拡大の速さが、倍々ゲームの様相を呈しています。保育園の周囲の小中学校でも学級閉鎖が相次いでいます。早良区内の保育園でもクラスターが発生しました。今回のコロナウイルス、オミクロン株は感染力が極めて強く、感染経路が分からない「市中感染」から、家庭内感染に広がっています。豊庄保育園でもいつ感染者が出てもおかしくない状況だと思えます。

21 総合・社会 12版 2022年(令和4年)1月12日(水) 毎

## 岩波ホール 7 月閉館

東京都千代田区(ミニシアター)岩波ホールが、7月29日(水)で閉館する。同ホールが11日、発表した。日本のミニシアターの草分けで、映画文化の多様性を守る存在だったが、新型コロナウイルス禍の打撃を受け、約50年の歴史の幕を閉じることになった。

同ホールは発表まで「新型コロナウイルスの影響による急激な経営環境の変化を受け、劇場の運営が困難と判断いたしました」と説明。今後は、上映中のドキュメンタリー「30人の私」の後、15日から日中公開映画「安魂」、29日から「ジョシヤ映画祭2022」(5番組)を上映予定。6月4日公開の「NOMAD」が最後の上映作となる。

同ホールは1968年2月、岩波書店の役員藤田二郎社長(当時)が建てたビルに、義妹の高野悦子さんを専任配人として開設された。当初は多目的ホールだったが、71年に映画館として再出発。200席あまりの小規模な劇場で、大手映画会社が取り上げないような隠れた名作を1館だけで公開する上映方式をとった。

70年代には大ジット・レイ監督のインド映画「大樹のうた」を集めた。80年代には岩波ホール

た、イタリヤのルキノ・ビスマン監督による「家族の肖像」などヒット。「岩波ホール」は「時代の流れ」とは言いにくいなが、とても残念だと話している。【勝田友臣】

過去の上映作品のチラシが所狭しと張られている岩波ホールの壁—同ホール提供

岩波ホールは、近年は興行環境の悪化で小規模公開では採算が取りにくい。ミニシアターブームを支えた観客層が高齢化したことから、興行成績が振るわぬ作品も増えていた。施設も老朽化に伴い2020年9月から改修工事を行ったが、この間に新型コロナウイルスの感染が拡大。21年2月に営業を再開したものの1年で閉館決定に至った。

映画ジャーナリストの大高宏雄さんは「興行を戻したような多様な作品を上映し、映画館目録のファンがいた。80年代には岩波ホールに行くのも文化的なステータスで、いつも満席だった。単座映画館を取り巻く熱気が失われる中でも、ミニシアターの原動力を維持してきた。簡単に「時代の流れ」とは言いにくいなが、とても残念だと話している。【勝田友臣】

ミニシアター草分け 50年で幕 東京

を呈しています。保育園の周囲の小中学校でも学級閉鎖が相次いでいます。早良区内の保育園でもクラスターが発生しました。今回のコロナウイルス、オミクロン株は感染力が極めて強く、感染経路が分からない「市中感染」から、家庭内感染に広がっています。豊庄保育園でもいつ感染者が出てもおかしくない状況だと思えます。

感染症の専門家や免疫学の研究者は、急激な感染拡大の原因となっているオミクロン株について、不明な点が多いとしながらも、抗体に詳しい東京大学児玉龍彦名誉教授は、「高齢者のほか、基礎疾患がある人や持病で免疫を抑制している人を中心に、早期に接種を始めるべきだ」(2021 年 12 月 15 日付毎日新聞夕刊)と、3 回目の追加接種を急ぐ必要性を強調しています。また、免疫学の第一人者として知られる宮坂昌行の大阪大学名誉教授は、「デルタ株におけるワクチンの重症予防効果は 90%以上、感染予防は 60%以上あり、インフルエンザワクチンの有効率が最も高くても 6 割程度なので、新型コロナウイルスのワクチンはよく効いています。オミクロン株に対してもワクチンの重症化の予防効果は期待できます。」(2022 年 1 月 12 日付毎日新聞朝刊)と述べています。

しかし、ワクチンの前倒し接種は、時間がかかりそうです。こうした状況下で私たちが現在採りうる対策は何か？これまで心がけてきた「マスク、消毒、換気、3 密をさける等」を改めて確認することが必要でしょう。第 5 波の後、こうした対策の意識がかなり緩んできているのを強く感じています。みなさんの感染対策へのご協力、よろしくお願いします。